

歴史は未来の羅針盤



近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」は、当面の間は入館料を無料としています。開館時間は午前9時から午後4時まで、休館日は毎週月・火曜日、祝日の翌日、年末年始等になります。ぜひともご来館下さい。『近江日野の歴史』全九巻は「旧山中正吉邸」、教育委員会事務局や各公民館にて一冊四、〇〇〇円で好評発売中です。ぜひお買い求めください。

山中正吉邸のはじまり

馬見岡綿向神社の参道から旧山中正吉邸の南側を眺めると、建物の屋根がいくつも連なっているようにすが目にとびこることができます。

初代山中正吉がこの地に屋敷を構えることになったのは、万延元（一八六〇）年に、仁正寺藩から土地を拝領したことにはじまります。このとき得た敷地の面積は百十坪（約三六三・六㎡）で馬見岡綿向神社の参道東側、笠懸の宮の北側にあたります。しかし、この敷地では手狭であ



▲南側から見た旧山中正吉邸

建物の移りかわり

江戸時代の建築に直接かかわる記録は残念ながら残っていませんが、最近の調査で明治十（一八七七）年頃に描かれた絵図が、確認できました。これによれば、当初の建物は現在「主屋」と「座敷」と呼んでいる部分で構成されていたようです。この絵図をもとに、当初の建物のかたちをたどっていきます。

まず、屋敷を取り囲む塀に設けられた門には石橋があり、主屋の玄関にまつすぐつながついています。主屋の基本的な構造は現在も変わりはありません。玄関右手には現在と同じく四つの部屋があります。

その奥には築山と泉水のある坪庭がつくられていました。さらに六畳と三畳の座敷があり、坪庭の横には二畳の部屋もありました。ただし座敷は現在よりもずいぶん狭く、その後部屋の拡張が行われたことが明らかです。

玄関奥の「にわ」には、七口のくどが左右に分かれて設置されていました。さらに格子を抜けると、板の間と流しや風呂があり、水周り場になっていました。現在は二階建てになっている玄関左に設けられていた下部屋は、この時はまだ平屋建てでした。

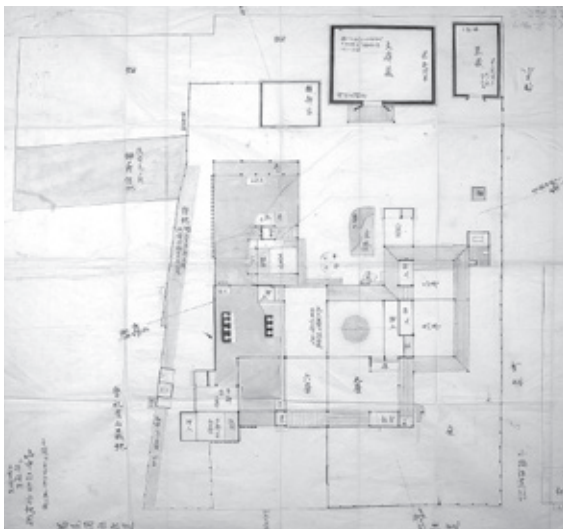
のちに新座敷が建てられる北側の隣接地には、「祭礼曳山蔵地」と書かれています。西大路の山倉が明治時代には現在よりも南にあったことがわかります。

昭和の増改築

山中正吉邸がほぼ現在のかたちになったのは、昭和十三（一九三八）年頃です。

現在、玄関左手にある洋間と新座敷もこの時に増築されました。モダンな洋間やステンドグラスを備えた浴室、天井の高い座敷、長押や床板に一枚板を使用した縁側など、主屋とは趣を異にした建物が建てられました。また、新たに庭もつくられました。それ以前からあった建物も、この時に大きく改築されたといわれています。

明治期の建物と現在の建物の違いを、ぜひ確認してみてください。



▲明治10年頃の山中正吉邸